

小さな診療所の出来事 3

船橋ファーム・アシスト・サービス
獣医師 船橋 史憲

壊死性腸炎の発生には日齢的にも季節的にも片寄りがあります。肉用鶏では35日以降、採卵鶏では若雌期に集中します。

毎年5月末から9月上旬の間で暑い日が続くと、発生しやすいです。

今年は7月上旬まではやや涼しく、発生が少なく、中旬以降気温の上昇に伴い壊死性腸炎が多く見られました。暑さによる食欲の低下や飲水量の増加が腸内細菌叢に変調を来とし、また腸の蠕動の低下による腸内環境の低酸素化が原因ではないかと推定されています。採卵鶏ではコクシジウム病の発生しやすいウインドレス多段鶏舎で夏季に多発しています。平飼いの種鶏場やブロイラー農場では床の湿りがコクシジウム病とその後の壊死性腸炎の発生要因といわれています。開放鶏舎では台風や梅雨時の大雨の後、降り込みによる床の湿りによって、コクシジウム病がよく発生します。今年の壊死性腸炎の発生は7月の後半と8月の後半とともに猛暑時に多く見られました。対策としては卵肉鶏ともにいかに涼しく飼うか、また、コクシジウムのワクチンを応用するか、腸内細菌叢を安定させる生菌剤の投与等を考慮すべきでしょう。

しかし、クロストリジウム菌による壊死性腸炎が発生した場合は、一刻も早く合成ペニシリン製剤で対策を立てましょう。図1は306羽の死亡が見られた事例で、翌日から3日間投薬した結果、死亡する鶏は激減しましたが、55～58日齢に再度同じ病気が見られました。

図1 壊死性腸炎による死亡曲線

